幼稚園の三月

幼兒にはこゝろの新芽の伸びてゆく月
先生には教師としての新年輪のふえてゆく月

倉橋惣三

一

三月は、子供達が幼稚園を了えてゆく月である。卒業という字は內容的に當らない。修了というも堅すぎる。修了と言いては形式すぎる。幼稚園保育の本質に即させて、何んという言葉がぴつたりするだろう。毎年、そんなことを考えさせられる三月である。

いづれにしても、この子供達は、今年ぎりで幼稚園を出てゆく、來月からはもう、今までのように毎月會えないのだと思えば、さすがにさびしい氣がする。しかし、子供達は皆、小學校へ進んでゆくのである。登つてゆくのである。假りにも、さびしく見送るような顏を見せてはならない。進め、登れ、子供達よ。幼稚園なんか振りかえつて見なくていゝ。わたしに別れを惜んでくれたりしなくていゝ。あなた達の目は前方を見つめる。あなた達の話題は明日である。三月は、あなた達にとつて、最も喜ばしい月である。入園のときも喜びであつたが、それ以上の喜びに溢れかえつているのが、幼稚園の此の三月である。

進めよ、登れよ。だが見送るわたしには、過去を偲ぶさびしさがある。あなた達の後の姿は勇ましいが、それを見送るわたしとしては、あなたに盡し足りなかつた過去の反省が、胸をひきしめずにいない。わたしは、あなた達のために、いつも一ぱいによい先生であつたろうか。

保育效果の測定ということが、この頃しきりにいわれている。そうして、その測定の標準というものまでが數々擧げられる。保育には勿論めあてがなくてはならぬ。なるようにならせるだけのことではない。從つてまた、保育しはなしでいゝものではない。そこに、保育效果のエバリュエーションも、嚴しい問題も當然あるべきことだ。しかし、保育という、子供と共につゞける生きた生活の業績というものは、必ずしも

簡單に測り定められるものではない。

第一に、子供の今在る姿が、保育の力だけによるものかどうかも明らかでない。但し、子供に望ましくない姿があればその責任は保育が自らの責任として心に悲しみもし、わびもしなければならぬことである。そして、それが幼稚園の三月の心を暗くさせることの少くないのも、年々の事實である。しかもまた、子供の今の姿のすばらしさが、必ずしも、わたしの手柄でないことも、一層大きな事實であろう。世間と親達は、それについて先生に禮をいうであろうが、子供としては、自分でこうなつたのだというかも知れない。自分でというのも言い過ぎとしても、幼稚園の力というのは、一層大きい言い過ぎかも知れない。幼稚園保育の力は素より大きい。しかし、子供の發達の素因は更に廣い。その中でも、子供自らの力は最も大きい。それらの復雜な結果をひつくるめて、何年間の保育効果といつて悪いということもないかも知れないけれども、あなた達を送り出す今年のわたしの心もちとしては、假りにも、その保育効果を、わたしの力として考えるような簡單な譯にはいかない。わたしは、あなた達のために喜ぶだけである。祝うだけである。その喜びの中に、少しは、あなた達のために盡した苦心を思い浮べ、その祝いの中に、少しは、あなたの感謝に甘えさせて貰うことによつて、幼稚園の三月の心がつゝましい自己滿足感で明るくさせられることはあるが。

第二に、子供は一人々々である。保育効果の標準の一般性も、くわしくは實に即し難いこともあろう。その標準が坡低要求である限り、どの子にも希望されることとしてよいが、保育効果としての評價を均等化することは自然であるまい。完全無缺ということは、教育における希望であつて、必ずしも實現の期待とはなり得ないであろう。その子はその子としての發達が實現せられ得ることで、表に書き上げる完さは、望ましいことではあろうが、望むべきことでも、望み得ることでもなかろう。その子をその子として育て上げることこそ、その子の保育効果であるし、その意味で、その子を離れた保育効果というのは、そうらくらくと、言いかえれば、そうかろがろしく考えられないことでもあろう。文學的表現を借りれば、幼稚園は、もと〳〵同一種の苗圃ではない。してみれば、幼稚園の三月には、いろ〳〵さま〴〵の花、少くも花の蕾が、そのとり〳〵の美しさや、美しさの期待において鑑賞される月である。決して全國一色に、園丁の丹精でも誇りでもないのである。保育効果は、どの子にも與えられなくてはならぬ。しかし、そのエバリュエーションは、決して一つなみではない筈である。もう一度繰りかえしていう。幼稚園の三月は、花の色とり〳〵の月である。

第三に、幼稚園保育効果のエバリュエーションは、完成評價ではなくて、期待評價である。一體が、幼稚園保育は、常に大いなる未完成を尊重していることである。その中で幼稚園保育としてエバリュエーションは考えられていゝとしてもそれは段階性のものであるよりは、伸長性のものである。區

ぎられた一段々々ではなくて、どこまでも、いつとなく伸びつゞけて行く新芽である。芽ぐみの高さは、いまの高さであるよりも、伸長を含み伸長につゞく高さである。これを未完價値といつて感じが伴わないならば、伸びゆくことの生長評價といつてもいゝ。この場合、その數學的評價は單純なる科學的評價の如く簡單には行われないが、もと〳〵教育は教育者の主觀を全く離れてはあり得ないことで、そこにこそ教育的評價の本質があるのでもある。少くも幼稚園の三月は、出でゝゆく幼兒を、今更に抱きしめてやりたいような氣のする先生達にとつては、保育方法の時々の途中における心理的尺度評價の必要とはまた別な芽の愛での教育評價の月である。

第四に、前に假りに名づけた生長評價という語をゆるされるならば、それは、今日を結論としないで、伸長を明日に待つ評價である。そして、幼稚園の三月の物さびしさは、その明日の教育効果がわたしの手から離れてゆくことにある。子供達が、晴々して進み學ぶ小學校を信頼しないではない。しかし、それはもう、自分が味える教育の樂しみではない。子供達を人手に渡すのを悲しむのではないが、今まで進めて來た生長評價を、人手に委ねることは、正直のところ物足りない。子供達のために悲しむのでは決してないが、自分のために殘り惜しいのである。こないだ來日した第二次米國教育使節團は、幼稚園が小學校のパートとして置かれることを勸告して歸つた、幼稚園の三月の心としては、小學校が幼稚園のパートとして置かれたらと思う。幹に根が屬すというよりも根に幹がつくというのが、より自然であるように。又、使節團はすべての幼稚園の教師は、小學校を教えられるのでなければならぬと、言いおいて行つたが、教えられるものなどというだけのことでなく、わたしは、わたしのこの子供達と共に、小學校へいつしよについて行きたい。そして、そこで、わたしの幼稚園保育の生長評價を、もう一つものにしたい。幼稚園の三月のさびしさは、それができないことの、いわばねざめの惡さである。それを中學まで、高等學校までと、後について歩いては、ことによつては、子供達に迷惑になることもあるかもしれない。しかし、自分が幼稚園で保育した子供を、大學に迎えた經驗をもつものには、生成評價の樂しみを、そこまで續け得るのである。こうした樂しい經驗を實際にもち得る教師は、そうざらにあるまいが、少くも幼稚園の三月は、教師に、そこまでの樂しいイマジネーションを樂しませるのでなければならない。――ふと思う。幼稚園の三月に落第のないことは、誠に、ほんとうのことである。

二

幼稚園の三月、子供には一人も落第はないが、先生には……何年間の保育の勞苦に對して、はたから彼これ批評しては濟まないが、先生自身としては、いろ〳〵と自ら省み、自ら悔めることも、多々であろう。そうして、自ら落第點をつける人はないとしても、保育としての評價は決して同じであるまい。自己評價だから、甘くも辛くも勝手であるけれど

も、ふだんとちがつて、自分に對して特に辛からざるを得ないのが、幼稚園の三月でもある。――保育のエバリュエーションは子供においての測定だけの問題ではない。

子供への保育効果は、自然のスロープの上向の日々であるとして、先生の保育者としての評價は、自らのはつきりした意識によるものであるから、反省の機會にあう毎に自分で自分を採點する。その採點頻度（如何に度々自己採點を行うか）は、人により機會により同一であるまいけれども、幼稚園の三月こそは、誰れでも共通のその機會であろう。他から强いられる機會ではなくて、出てゆく子供の一人々々の後ろ姿を見送りながら、自ら振りかえられる自然の機會である。日々の保育は、反省のいとまもなく忙しいが、保育の一とくぎりである三月には、とにかく、子供を送り出した後の、しいんとしたような心の劃線が出來る。一年毎に經驗するその劃線は、いわば、幼稚園の先生の年輪ともいえるものであろう。樹木は年輪によつて成長してゆく、幼稚園の先生も保育經驗の年輪によつて成長するといつてよくはあるまいか。先生の反省の月、幼稚園の三月は、先生の保育者としての年輪が加わつてゆく月である。伸びるというよりも、多くなつてゆく月である。多くなるばかりでなく堅固に充實してゆく月である。だが、反省しない三月は、幾度重ねても年輪にならない。

幼稚園の三月が、新しい子供の月であることはいうまでもない。と同時にまた、新しい先生の月である。新しい子供は入れかわる。新しい先生は入れかわりではない、充實である。新しく充實することによつて、きのうのまゝの、すなわち、舊體依然、何んのかわりもない先生でなくなるのである。

先生が新しくなるとは、何も新入園兒の顏がかわるように新しくなるのではない。保育の仕方が新しく變るというのでも、必ずしもないかも知れない。そんな外にあらわれる新しさとも限らない。その人の保育についての感じ方が新しくなるのである。幼稚園についての考え方が新しくなるのである。

その新しくなるというのも、必ずしも變化ということには限らない。同じ感じ方でも考え方でも、觀方でも、その深さや濃やかさや、わけても、その鮮度が加わるのである。新しいとは生きていることである。鈍つていないこと、だれていないこと、氣のぬけていないことである。そうして、それは反省によつてのみ、自己を新しくいのちづけ得られるのである。教育者の新年輪は教育者としての新鮮度の更新である。